

らである。神経験は長い歴史を持ち、ユダヤ教のごとき歴史的宗教の歴史を形成してきた。その歴史をみると、われわれは、神経験が「神経験をあらゆる側面から侵略しようとかかる、形而上学、グノーシス、呪術、政治などの非宗教的要素との闘争を繰り広げてきた事に気づく (M. Buber, *Gottesfurchen*, 528)。その戦いとは、人間と神的なるものとの間の滅亡不能な (unentwertbar) 出合いの場である、生きられる具体的現実を守り抜くための戦いであり、「われわれの運命とわれわれの行為との間に、あるいはわれわれの呼びかけとかなたからの応答との間に、神秘的な対話のなされる瞬間」(ibid.) を護ることである。この戦いは人間が神から付託された、人と現実との生きた統一を実現し、われと永遠のなんじとの関係を成就することである。これはユングの言う如き、実体のない現象学的心理現象では決してない。

ポエジーと哲学

——ドイツ初期ロマン主義の聖なるものへの関連——

田 口 博 子

十八世紀末のイエーナで生じたドイツ初期ロマン主義運動は、啓蒙主義に代表される権威への反撥と同時にその継承という複雑な面を呈する。理性は全面的に否定されるわけではない。しかしその活動は俎上に載せられ、理性の衣鉢を継ぐ哲学

にポエジーが対置される。今回の発表ではノヴァーリスとシュレーゲル弟、そしてやや立場が異なるシュライアマハーにおいて、ポエジーと哲学が如何に無限なるものと関連しているかを考察する。

「来るべき哲学のための断章」は、ポスト・フィヒテ世代の共通意識である、従来の哲学のありかたに対する異議申し立てである。「ロゴロジー (Logologie)」はノヴァーリスによる造語で、「ロゴスの累乗」を意味し、そこには「メタ」の意識が色濃くあらわれている。

来るべき哲学は「哲学の哲学」だが、「……常に何かしら個人の哲学の「要素」を有しているであろう」。哲学の理想は偶然的なものを減じることだが、メタ哲学の叙述では非哲学な個人的・偶然的なものが混ざることやぶさかでないという感じである。また「哲学という営為は……自己と会話すること」で、本来の意味で自己が開示されることである。そして、哲学するという決意は「奴隷を解放する行為。つまり、「自己へと向かうのを後押しする衝撃」と把握される。

だが哲学は個人の営為にとどまらない。ところが伝達に使用される言語は、不十分な媒体である。それを補うのが師匠で、「真の教師とは、道標である」。「真の共同哲学とは……求められている世界へと共同で移動することにある」。真理への飛行の際、先達は交替するという。哲学という営為を真剣に行う気構えさえあれば、指導者には誰でもなれるというところに、ユートピアへの志向を読み取ることができるのではないか。

プロテスタンティズムが興隆するにつれ、聖なる感覚のみな

第3部会

らず芸術への感覚も衰弱し、啓蒙の時代では哲学への信仰が覇権を握り、ポエジーの肅清が始まる。その本性からしてポエジーは自己と他者を結びつける働きを有し、さらに「世界家族」あるいは「万有の美しき経綸」である美しき社会の形成に寄与する。哲学が体系と国家形成という力により、個人と人類・万有の調和をはかるのに対し、ポエジーは生命に即してそれを行う。「ポエジーを通して、最も高次の共感と協働・共同活動性(Coactivity)が生じ、有限なるものと無限なるものの最も親密な共同体が成立する」。ポエジーとは社会との紐帯を越えて、万有との紐帯をも示唆し、その紐帯は「生命」に基づくのだ。

ノヴァーリスによれば、ポエジー哲学の両極の関係により文化は三つの段階を辿るという。「論証的な」思想家(スコラ学者)と詩人がそれぞれ孤立して活動を行う第一段階。第二段階では哲学とポエジーが上辺だけ合一される。この時代の代表たる折衷主義者はリアルな世界に閉塞されている。最終段階を体験するのは、思想家と詩人が真の意味で統合された芸術家である。彼らは二つの異質な哲学的活動を移行する能力を持ち、「自己を漂わせて、その状態で直観する」。この段階は「超越論的ポエジー」に対応する。

シュライアマハは、『宗教論』で宗教の中核部分たる宇宙との繋がりを直観する感性を涵養する役割を芸術に期待する。他方シュレーゲル弟は哲学とポエジーの統合を果たすのは芸術家と予言する。芸術家とは「より高次の働きをする魂の感官」である。更に「自分自身の宗教、すなわち無限なるものについて独自の見解を有しているものだけが、芸術家たりうる」。芸

術家とは一種の聖職者(祭司)の役割を担うものではないのか。聖職者たる芸術家の像は、ノヴァーリスの『サイスの弟子たち』、『青い花』にも顕現している。

フィヒテとシェリングにおける

ヨハネ解釈について

諸岡道比古

本論は、フィヒテとシェリングが『ヨハネによる福音書』第一章をめぐっていかなる議論を展開しているか、を探究するものである。両者は共に神学的立場からではなく、自らの哲学的立場からヨハネ福音書の解釈を試みている。

フィヒテはヨハネの教説をあらゆる時代に妥当する絶対的真理とある時代に対してのみ真理であるものとに区別する。前者は一節から三節までであり、「イエスの全教説の要旨ならびに普遍的立脚点」を示す。フィヒテによれば、神は「永遠の昔からあり、永遠に変化することはない」ものであって、神による万物の創造など考えられない。内的で自らのうちに隠れた存在である神は、その存在を自らの現存在により開示される。神の現存在は知であり、知において世界および全事物が現実的になる。換言すれば、「世界および全事物はただ概念において、つまりヨハネの言う言葉において、……意識されたものとして現存在する」。この関係こそ「言葉が最初にあった。……万物は